

# 第13回「日本語大賞」

テーマ「 」に伝えたい言葉

中学生の部 優秀賞 受賞作品

## 言の葉の薬

兵庫県  
川西市立清和台中学校  
二年 皿海 百花

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

ある時、友人が私に「これ見て」と言つて右腕を見せてきた。その先にあつたのは複数の痛々しい切り傷だった。自ら切つた傷だった。私は目の前にある光景に思わず目を瞑りたくなつてしまった。勿論友人の腕に自ら作つた傷なんか本当はあつて欲しくないし、して欲しくもない。でもそのことを本人に伝えてしまつたら「分かってくれないんだ」という気持ちになるかもしれない。そう思ひとにかく彼女の話を聞き自分の本当の思ひは言えずにいた。そうして家に帰るなり私は母にそのことを話した。言わないでおくこともできたけれど彼女の命に関わる問題だから私一人の判断で命が消え入ることだつてありうるからだ。すると母は、私が彼女にどうして欲しいのか聞いた。なので私は「リスカなんてして欲しくもないし、ただでさえ心が傷を負っているつていうのに物理的にも自分を傷つけて追い込んで何になんのかなつていうのが私の思ひ」と答えた。その想ひに対して母は「そのままその子に言つたらいいんじゃない？ ベストアンサーなんて誰にも分からないし」と言つた。私はその言葉にハツとした。自分は今まで彼女が求めている言葉をいつの間にか探していたことに気がついた。母が言つたようにそんなこと本人ですらも何を求めているのか彷徨つているからこそ、私に打ち明けたのかもしれない。この状況から救つてほしいという SOS なのかもしれない。

翌日私は彼女に正直な思ひを打ち明けた。「友達としては、リスカはして欲しくない。気持ちからは分からないわけじゃないけど、リスカをして何になるのかな」そう言つた。彼女にとつては厳しい一言だったかもしれない。私も上手く伝えられたのか分からない。だから怖かつた。私の言葉は命を担つた言葉になるかもしれない。その時どう思つたのか彼女はあまりその言葉に対して強くは反応しなかつた。しかし、翌日彼女の口からは予想だにしない言葉が飛び出てきた。「昨日さリスカしたことをお母さんに話したよ。話したらお母さんはもうリスカはしないでくれて泣いてたけど——」そう言つた。彼女の目は前より明るく希望に向かつているように見えた。それは、これまで、たつた独りで背負つていた傷を誰かに打ち明けることにより少し自分を解放することができたからなのかもしれない。

後に母が言つていたのだが、私が相手のことを想つて悩んでいたもので、どんなに拙い言葉でも相手にはちゃんとその想ひは伝わると思つたから、「そのままその子に言つたらいいんじゃない？」と言つたそうだ。

言葉は、言う相手や、その人との関係性、使う言葉によつて良くも悪くもなる。まるで毒ともなり得る薬のように。だから言葉は、薬と同じように慎重に扱わなければならない。一つ一つの言葉で死まで追い込む毒になると同時に、人を救える薬にもなるならば、私は言葉で人を救えるような心を持つた人間になりたい。

近頃、その想ひとは裏腹に誹謗中傷で、心が傷ついた人たちが増えている。だからこそ今、私は多くの人を救えるような言葉を探し、様々な形でメッセージを送り続けたい。